# 発音指導に主眼をおいた「英語LL演習」の実践*

桑　本　裕　二

## A Case Study of Teaching "*Eigo LL Enshū* (Oral English Practice)" focused on English Pronunciation

Yuji Kuwamoto

（平成23年11月25日受理）

This is a case study of teaching "*Eigo LL Enshū* (Oral English Practice)," which came to be held beginning with 2011 as a new subject for the third year in Akita Kōsen. In this course, I used a textbook of mastering English pronunciation for, mainly, elementary school teachers, which I myself wrote in 2011. I expected a certain level of effects of introducing the textbook to Kōsen students as English beginners. I focused this class on practicing pronunciation repeatedly. As a result, the students were roughly able to master the pronunciation on segmental level, including consonant clusters, diphthongs and coda consonants in closed syllables. On the other hand, it turned out to be very difficult to teach English accent and rhythm. To solve this problem, I should improve a way of teaching in this class, for example, more time for teaching accent or rhythm and so on.

### 1. はじめに

高専の英語教育のカリキュラムは，中学卒業直後の初歩段階から始まり，5年次の卒業までに，ある程度の実用性を学生に身につけさせることを期待されているが，限られた授業時間数であらゆる英語技能の習得をもりこむのはきわめて困難である。このなかで，いかに効率的に英語教育を行うことができるかに対しては，たとえばカリキュラムの構成を改変することも重要な項目のひとつとすることができる。桑本（2010）で指摘したように，必要とされる，または優先される技能の養成としては，読み・書き技能を用いた，書かれたものの理解，表現が挙げられ，聞く・話す技能を用いた，音声を介する理解，表現は，その養成は後回しにされるか，なおざりにされてしまうかということになってしまう。

これを踏まえて，秋田高専の英語教科では，2009年度入学以降の学生向けのカリキュラムで，1，2年次で読解と文法をもっぱらとした科目編成とし，それまで1，2年次に行っていた音声教育，具体的には，「英語LL演習」（1年次，2単位），外国人教師による「英語会話」（2年次，2単位）を，それぞれ1単位にし，読解と文法を一通り終わった3年次に行い，その効果を期待するものに変更した[1)]。2011年度は改編後のカリキュラムによる学年が3年次に進級する年度にあたり，このカリキュラムのもとでは初めての「英語LL演習」「英語会話」実施となった。

筆者はこのうち「英語LL演習」を担当した。授業内容は，きれいな英語発音を習得させることを目的とした。

筆者はカリキュラム改編前の1年次の「英語LL演習」も担当してきたが，その際，発音記号を教えた上で発音指導を行った。その授業では，発音記号を覚えさせ，正確に使いこなせることを目標にしていたため，実際の発音の習得を確認することができず，また，結局発音記号の習得も十分にできないという反省があった[2)]。

この反省も踏まえ，今回初めて担当した「英語LL演習」では，受講者に実際に発音を演習させ，英語発音の習得を中心に据えることにした。

使用するテキストとして，これに先立って筆者が書き下ろした『小学校英語　発音のフシギ』（桑本2011）を採用した。桑本（2011）は，元来小学校教師向けの英語発音の啓蒙書として，新書として出版されたものである。おそらくは大学教養課程までで英語を学習しなくなってしまった，そして，2011年

度から義務づけられた小学校の英語活動で，ひさしぶりに英語と付き合わなければならなくなってしまった小学校教員に対して，英語発音のからくりやきれいな発音のための秘訣を書いたものである。英語学習の初心者を対象とするという前提のもと，難解な表現をさけ，また過度に専門的な用語の使用，こみいった説明をさける工夫をした。英語の基礎を学ぶ，または学び直す，ということにおいては，高専の学生も小学校教員もほぼ同等であると見なすことができ，本来の対象者である小学校教員に代わって，高専の学生に対してその発音指導の効果を桑本（2011）を用いて実践した。本稿は，担当クラス第３学年全４学科のうち，2011年度前期に実施した２学科（機械工学科３年，電気情報工学科３年）についての「英語LL演習」の実践報告と，全授業を終えての反省，問題点を考察したものである。これは，2011年度後期開講（本稿提出時点で開講中）への対応，改善にもつながり，ひいては本来の対象者である小学校教員への効果も期待することができる。

## 2. 使用テキスト桑本（2011）の内容について

使用テキストとした桑本（2011）は，次のように構成されている。

第１章　「ことばの音」って何？
第２章　英語の音声
第３章　英語の音節
第４章　英語のアクセント
第５章　英語のリズム
第６章　おわりに

それぞれの章の詳細は以下の通りである。

第１章 「ことばの音」って何？

言語音とは何かについて，音声一般から機械音，他の生物の発する音などを排除し，人間の発声を定義づける。最終的に，発声器官の部位を詳解し，発声のメカニズムについて触れる。

第２章　英語の音声

はじめに音声の分類としての「子音」「母音」の定義について触れ，これらの分類が最も基本的であることを示した上で，はじめに英語の子音，次に英語の母音の順で発声のからくりやその発声法について説明する。それぞれは以下の通りに要約できる。

① 子音

英語の子音をその調音点，調音様式に基づいて図示すると以下の表の通りとなる。用いた記号は [r] 以外は国際音声記号（IPA）に準じたものである。

| | 両唇音 | 唇歯音 | 歯音 | 歯茎音 | 後部歯茎音 | 硬口蓋音 | 軟口蓋音 | 声門音 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 閉鎖音（破裂音） | p, b | | | t, d | | | k, g | |
| 摩擦音 | | f, v | θ, ð | s,z | ʃ, ʒ | | | h |
| 破擦音 | | | | | tʃ, dʒ | | | |
| 鼻音 | m | | | n | | | ŋ | |
| 側面音 | | | | l | | | | |
| 接近音 | | | | r | | j | w | |

この表に基づいて，日本語の音声との対象から，筆者はこれらの英語の子音を次の３種類に分け，段階的に説明することとした。

Ⅰ．日本語の音とほとんど同じ子音：
[p] [b] [k] [g] [tʃ] [dʒ] [m] [n] [j] [w]

これらの子音は，それぞれ，「パ行」「バ行」「カ行」「ガ行」「チャ行」「ジャ行」「マ行」「ナ行」「ヤ行」「ワ行」の最初の子音とまったく同じと考えてよい，とみなした。注意がいるのは [m] [n] が音節末に来たときの，「ん」との発音の違い，たとえば，"them" [ðem̩] — "then" [ðen̩] の明確な区別，さらに，[ji] [wʊ] を含む英語の単語，たとえば，"year" [jiər], "woman" [wʊmən] など。

Ⅱ．日本語と少しちがう場合のある子音：
[s] [z] [t] [d] [h]

それぞれ，「サ行」「ザ行」「タ行」「ダ行」「ハ行」の子音と同じとみなしてよいが，前２つの「イ段」，「シ」「ジ」，後ろ３つの「イ段」「ウ段」，「チ」「ツ」「ヂ」「ヅ」「ヒ」「フ」の子音は英語の [sɪ] [zɪ] [tɪ] [tʊ] [dɪ] [dʊ] [hɪ] [hʊ] とは全く異なることが強調される。

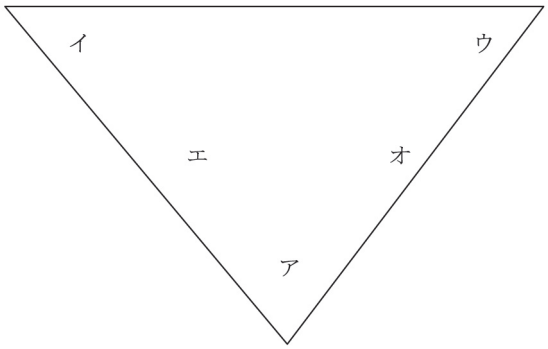
Ⅲ．日本語にない子音：
[f] [v] [θ] [ð] [ʃ] [ʒ] [l] [r] [ŋ]

これらの子音は日本語には全くないので[3]，調音器官の位置やふるまいについて，詳しく説明する必要がある。特に，[f] [v] は「下唇を上の歯で噛む」，[θ] [ð] は「上下の歯で舌を噛む」ということは，必ずしもないということを説明，また，[ʃ] [ʒ] の「シュ」「ジュ」との違い，[l] と [r] の違いについて詳述した[4]。

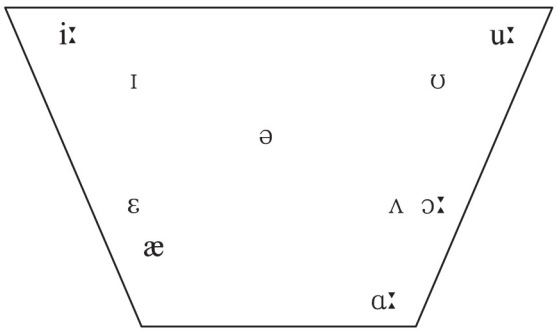
② 母音

母音の調音点を示す母音四角形（三角形）をもちいて，日本語の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の5母音体系と，英語の10種類の単母音を図示すると次の通りである。

日本語の母音体系



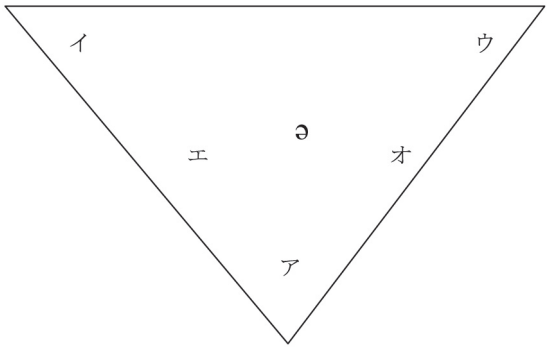

英語の単母音の体系




これらの対照により，日本語と英語の母音体系がほとんど一致しないことが明示される。これに基づき英語の母音を説明するが，基本的には日本語のカタカナ語の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」として扱われる音をそれぞれ一まとめにし，それらに基づいて日本語の母音との差異を強調する形をとった。

Ⅰ．「ア」に聞こえる音：
[ɑː] [ʌ] [æ] [ə]

それぞれの音の調音点の違いを上図の母音四角形で説明した。[ʌ] と [æ] については，"mad" [mæd] — "mud" [mʌd] などの最小対立の語の対照によって違いを確認した。また，[ə] は日本人のとらえにくい音であるが，「あいまい母音」という俗称は，調音点が母音三角形のほぼ中央にあって調音器官に緊張のない状態の音声であることを明示した。




Ⅱ．「イ」「ウ」に聞こえる音：
[ɪ] [iː] / [ʊ] [uː]

[ɪ] と [iː]，[ʊ] と [uː] は，標準的な英語音声学の概説書では長短の差異よりは音質の差異が強調される[5]。桑本（2011）では，あえて音質の違いを無視し，[ɪ] [iː] / [ʊ] [uː] を長短の区別としてとらえた。また，特に [ʊ] [uː] については円唇性を強調し，日本語の「ウ」とは異なる音であることを説明した。

Ⅲ．「エ」「オ」に聞こえる音：
[e] / [ɔ]

[e] については多少の誇張があるものの，ほぼ「エ」と同じであるとみなした。また，[ɔ] は，「ア」に聞こえる [ʌ] と調音点が同じことやアメリカ英語などで [ɑ] になるといった地域差も考慮し，ほぼ「ア」のように発話すべきである，とした（たとえば，"dog" [dɔg] は，母音に関しては，「ドーッグ」よりは「ダーッグ」に近いことを説明した）。

Ⅳ．二重母音，三重母音：
[eɪ] [aɪ] [ɔɪ] [aʊ] [oʊ] [ɪə] [ɛə] [ʊə] / [aɪə] [aʊə]

二重母音については8種類とした。日本語の「愛（あい）」と英語の "I" [aɪ] の違いを説明，

また，[eɪ] [oʊ] は長母音 [eː] [oː] ではないことを強調した。三重母音は [aɪə] [aʊə] の 2 つ。3 つの母音連続は言いにくいので，日本語の「ファイヤー」「アワー」のように [j] や [w] が挿入されないように注意が必要であることを明記した。

第 3 章　英語の音節

日本語にほとんど表れない閉音節の構造や，"strike" [str̲aɪk] などにみられる頭子音連続について触れ，日本語との違いを強調した。日本語の「マクドナルド（ローマ字：makudonarudo）」（6 音節）が英語の "McDonald's" [məkdɑːnəldz]（3 音節）と全く違って聞こえるのは，音節数が違うことが理由の一つであると説明した。

第 4 章　英語のアクセント

前章の「マクドナルド」と "McDonald's" を再び引き合いに出し，日本語の高低アクセントと英語の強弱アクセントの違いを説明。楽器になぞらえるなら，日本語のアクセントはピアノのような音階を奏でる楽器，英語のアクセントは太鼓のような音階のない，強弱を表現しうる楽器である。

第 5 章　英語のリズム

日本語のリズムは五七調・七五調のような，モーラが基準になったもの。これに対し，英語のリズムは強－弱または弱－強が繰り返されるものである。英語のリズムは，韻文以外でも通常の文章にも多用されており，そのリズムを保つためにアクセントが移動する場合もあることなどを述べた。

第 6 章　おわりに

小学校教師にあてた英語発音のテキストであることを意図した，全体をまとめる章である。

## 3. 授業実践

3.0

本節では，2011年度前期に行った，桑本（2011）をテキストとして使用した「英語LL演習」の実践について述べる。

3.1　授業の概要

授業の概要は以下の通りである。

授業科目名：英語LL演習
授業内容：英語の発音について，それぞれの単音の発音，音節，リズムなどについて理解を深める[6]。
前期週 2 時間（100分），1 単位
開講クラス[7]（受講人数）：機械工学科 3 年（44名[8]），電気情報工学科 3 年（44名）

3.2　授業内容

2011年度前期に行った「英語LL演習」2 クラスについての，授業計画に沿った項目ごとの授業実績は以下の通りとなる。

授業回数：14回[9]
第 1 回　授業ガイダンス
第 2 回　第 1 章①
第 3 回　第 1 章②
第 4 回　第 2 章「2 子音と母音」まで
第 5 回　日本語とほぼ同じ子音①
第 6 回　日本語とほぼ同じ子音②
第 7 回　少し注意がいる子音
第 8 回　日本語にない子音①
第 9 回　日本語にない子音②
第10回　日本語にない子音③，母音①
第11回　母音②
第12回　音節・アクセント・リズム
第13回　評価テスト（定期試験）
第14回　テストの解説，総評，授業アンケート

この授業内容はほぼシラバスに沿ったものとなったが，この授業展開により，桑本（2011）の「第 6 章おわりに」以外のすべての本文を網羅していることになる。

3.3　授業の方法

第 2 回の授業からテキストに沿った授業に入ったが，第 4 回の授業まではテキストの内容についての講義を行い，第 5 回から第12回までは，それぞれの音声に関する説明を行った後，その音声を含む英語の単語を用いて発話（発音，音節，アクセント，リズム）の演習を行った。

まずはじめにテキストの例文（サンプルの英単語）をPowerPointのファイルに写したものをプロジェクターで示し，当該の単語（それぞれ数語ずつ）を，

筆者が発話した後全員に復唱させ，その後，一人ずつ発音させて習得を確認する。はじめの方の，「日本語とほぼ同じ子音」については，カタカナを読むのとほぼ同じである，と説明していることもあり，（少なくとも当該の子音のみの発音に関しては）ほぼ全員が正確に発音できるが，徐々に困難な発音となるにつれて，なかなか正確な発音ができない学生が出始めたが，その場合は，できていない学生だけを選んで繰り返し演習させるようにした。

## 4. 評価法 ー定期試験の概要ー

授業で演習した発音の知識をきちんと理解したかどうかは，実際に正確な発音が実践できるかに反映する。本授業の評価は，実際に発話させて，その正確さを確認するという，口頭形式のチェックで行うこととした。

試験の問題は，授業で説明し，実際に発音を演習した音を含む英単語を約50語示し，それらを発音する，というものである。実際に行った問題は以下の通りである。

| | 配点 | 問題 | |
|---|---|---|---|
| (1) | 1 | peach | |
| (2) | 1 | beach | |
| (3) | 1 | coffee | |
| (4) | 1 | go | |
| (5) | 1 | chance | |
| (6) | 1 | joke | |
| (7) | 1 | member | |
| (8) | 1 | nice | |
| (9) | 2 | then | them |
| (10) | 1 | young | |
| (11) | 1 | wine | |
| (12) | 2 | woman | |
| (13) | 1 | set | |
| (14) | 2 | sit | seat |
| (15) | 2 | music | |
| (16) | 1 | time | |
| (17) | 1 | dark | |
| (18) | 2 | tea | |
| (19) | 2 | disco | |
| (20) | 2 | hat | hit |
| (21) | 2 | leaf | |
| (22) | 2 | feel | |
| (23) | 4 | right | light |
| (24) | 4 | food | hood |
| (25) | 4 | berry | very |
| (26) | 4 | sing | thing |
| (27) | 2 | this | |
| (28) | 2 | death | |
| (29) | 4 | sea | she |
| (30) | 4 | singer | finger |
| (31) | 4 | hard | heard |
| (32) | 4 | mad | mud |
| (33) | 2 | bird | |
| (34) | 2 | live | leave |
| (35) | 2 | book | boots |
| (36) | 2 | bed | |
| (37) | 2 | dog | |
| (38) | 4 | low | law |
| (39) | 2 | fire | |
| (40) | 2 | hour | |
| (41) | 2 | street | |
| (42) | 2 | swimming | |
| (43) | 2 | McDonald's | |
| (44) | 3 | What a wonderful day it is! | |
| (45) | 3 | men and women | |
| (46) | 3 | Fifteen thirty! | |
| 計 | 100 | | |

この問題に対して，1回につき10～12人のグループに分けて，確認のテストを1クラスにつき計4回行った。

秋田高専における各授業科目の合格点は50点である（3年次以下の場合）。授業の評価（成績）は，この試験の得点をそのまま評価点にすることとした（つまり，試験結果100%＝最終成績）。

## 5. 問題点と反省点

授業での発音の演習，および最終試験の様子をふりかえって，受講学生に対する発音習得の達成状況をまとめると，およそ次のようになる。

**＜発音習得を達成できたと思われる点＞**

a）単音に関すること

・[sɪt] "sit," [siːt] "seat" などのそれぞれの音，また，それぞれの区別
・ "music" の中の [zɪ], "tea" の中の [tiː], "disco" の中の [dɪ]
・ "hit" の中の[hɪ]
・[l] と [r] の区別
・[b] と [v] の区別
・ "mouth" の中の [θ]（音節末の場合）

・[æ] と [ʌ] の区別（"mad" vs. "mud"）
・[ə] の発音。他と区別しないで単独で発音する場合
・[ʊ] の円唇性（日本語の「ウ」のようにはならないこと）
・[ɔ] の開口度（[o] のようにならないこと）
・[oʊ] と [ɔ:] の区別（"low" vs. "law" 二重母音vs. 長母音）
・[aɪə] [aʊə] などの三重母音

b）音節構造に関すること
・ "street" などの子音連続の発音
・閉音節の発音

c）アクセントに関すること
・日本語とは異なる強弱アクセントの把握

**＜発音習得を達成できなかったと思われる点＞**

a）単音に関すること
・ "woman" の中の [wʊ], "year" の中の [jɪ] など，わたり音＋高母音の発音
・[f] と [h] の区別（"food" vs. "hood"）
・音節末の [f] [v] など
・[s] と [θ] の区別（"sink" vs. "think"）
・[ð] の発音
・[ʃ] の発音
・[s] と [ʃ] の区別（"sea" vs. "she"）
・語中の [ŋ] と [ŋg] の区別（"singer" vs. "finger"）
・[ɑ:] と [ə:] の区別（"hard" vs. "heard"）

b）音節構造に関すること
・音節末の鼻音の発音，区別（例："them" vs. "then"）

c）アクセントに関すること
・練習をする上では問題ないものの，知らない単語のアクセントが常識の範囲を超えているケースが目に付いた。

d）リズムに関すること
・強－弱または弱－強の繰り返しであることが理解されていない。

単音に関しては，授業開始前から発音指導の困難が予想された，[s], [ʃ], [θ] など，いわゆる「S系」の発音のうち，[s] の音の習得は達成されたものの，[ʃ] の発音に関して，また [θ] も音節内での位置や他の音との比較においては習得達成が困難であった。日本語にも存在する [p] [k] [b] [g] などはさておき，英語独特の音声である [v] や [l] [r] などは意外にも習得が達成できたと思われる。反面 [f] は，困難であった。

日本語にない音であるから習得が困難であるとは必ずしも言えず，かえって，日本語のカタカナ語（外来語）になる場合に全くちがう音であるにも関わらず，習慣的に異なる音を認知してしまうために実際の英語発音の把握が困難になっているのではないだろうか。これは，"food" の発音がカタカナ語「フード」に引きずられ，"sheet" の発音が「シート」に引きずられ，また，この場合は日本語におけるローマ字の＜shi＞（シ）の表記に迷わされてしまって正しい英語発音 [f] [ʃ] ができないのである。

母音に関しては，日本語の５母音体系と全く異なるという出発点から考えると，意外にもその発音の習得はうまく達成できたとしていい。しかしながら，やはり日本語のカタカナ語の影響で，区別の困難な対は残されてしまった。たとえば，[ɑ:] と [ə:] の区別で，"fast" も "first" も日本語のカタカナ語ではどちらも「ファースト」となるため，音の区別を認識しにくい。

音節構造の把握は，特に閉音節の発音を中心として，当初に比べて格段に習得が達成できたとしていい。[k] [t] [p] などの閉鎖音や [s] [z] などの日本語にも存在する摩擦音に関しては，その子音で音節が終わる，すなわち母音添加をともなわない子音単独で発音することが指導の結果ほぼ達成できた。日本語にない摩擦音の音節末での発音は，"mouth" の [θ] のように巧みに発音できたものがある一方，[f] [v] などは困難なようであった。また，日本語には豊富にみられるものの，通常は区別のない音節末の鼻音 [m] [n]（"them" vs. "then"）はやはり把握が難しいようであった。

アクセントは，強弱アクセントに関する知識を教えたのちに指導する意義は大いにあったようだが，発音を正確にすることに集中するあまり，アクセント付与に関して注意がいきわたらず，潜在的には理解していてもなかなか正確なアクセント付与を行うことができないという受講学生も多くいた。

リズムに関しては，十分に理解させられたとは言い難い。これは，文，句単位の音読の演習をほとんどしなかったことと，授業計画上，音節，アクセント，リズムをただ１回の授業で行わざるをえなかったように，説明や演習に十分な時間を使えなかったことなどが原因であろう。

## 6. おわりに

以上，2011年度開講の「英語LL演習」の授業実践と，筆者自ら書き下ろした桑本（2011）をテキストとして導入した効果，および，それらの問題点について考察した。

発音指導に関して，単音および音連続，音節構造の把握と正しい発音に関しては，指導の結果ほぼ習得が達成できたとしていいと思う。英語教科に関わるカリキュラム変更以前（2008年度以前）の開講授業である同名の「英語LL演習」（当時は1年次開講，通年2単位）での，反省点を受けて，過度に発音記号の説明に偏ることをさけ，内容理解を筆記試験によって確認するということをやめて，発話を実演させることを重点的に行った効果は十分に発揮されたと言っていい。

この一方で，アクセント，リズムの習得は十分に習得させられなかった。これには，まず，単音の指導に重点を置き過ぎたことが反省点としてあげられるだろう。また，授業計画において，当初の予定で超分節的要素であるこれらアクセント，リズム（文，句単位のイントネーションも含めて）の指導に十分な時間数を割り当てなかったことも主要な反省点である。このような反省点を改善すべく，当面は，現在開講中の授業（2011年度後期開講中：物質工学科3年（44名[10]），環境都市工学科3年（44名））に生かしていかなければならない。

さらなる検討事項として，本授業「英語LL演習」の次の段階の科目として，または通年2単位にして後半の授業展開として，文単位，段落単位の英文音読を演習する活動を授業内容として行うということも考慮すべきであるということを挙げておきたい。英語発音の正しい知識を身につけた上で，英文音読を演習することは，さらに発展した英語発音を身につけることにつながるだろうし，ひいては読解力を向上させることにも直結すると期待できるからである。

## 注

* 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B），課題番号：22320100）の援助を受けた研究成果の一部である。

1）改編前／後の，学年進行による英語科目の比較は桑本（2010：101）を参照のこと。
2）内容理解の定期試験も発音記号の理解を確かめる筆記試験であったので，音声の教授には至らなかった。
3）[ŋ] は実際には日本語に存在するが（格助詞の「が」[ŋa] など），若年層で失われつつある音韻であり，地域方言の音韻体系によっては存在しない場合も多々あるため，とりあえず「日本語に存在しない」とみなした。
4）[l] vs. [r] に関して記述したのは8ページに及ぶ。
5）[ɪ] [ʊ] を弛緩母音という。
6）『平成23年度授業計画』秋田工業高等専門学校シラバス，各学科向け，「英語LL演習」の項より（文責：桑本裕二）。
7）3学年全4学科中，前期実施は機械工学科，電気情報工学科の2学科。物質工学科，環境都市工学科は後期実施。本稿提出時点で開講中。
8）機械工学科3年については，在籍45名中，外国人留学生1名を除く。
9）実授業回数は15回，授業時数は30回であるが，諸般の事情により1回は自習とし，実質の回数は14回である。
10）物質工学科3年在籍45名中，外国人留学生1名を除く。

## 参考文献

桑本裕二「英語スピーチコンテスト参加を通じた英語の発音指導」『秋田工業高等専門学校研究紀要』第45号，99-106，（2010）
桑本裕二『小学校英語　発音のフシギ　from いんぐりっしゅ to English』秋田魁新報社，（2011）